第４章　質問紙調査

この章では，少年院出院者を対象として実施した質問紙調査の結果を基に，少年院出院後に立ち直った者の特徴を，再入院した者との比較から明らかにする。また，一般青少年を対象として実施した調査の結果を参考として示し，一般青少年との比較という観点からも，少年院出院後に立ち直った者の特徴について検討する。

第１節　少年院出院者を対象とした調査

１　調査対象者及び方法

平成25年１月から同年３月までの期間に全国の少年院を仮退院により出院した者（男子788人，女子84人）のうち，調査に同意した者に対して，平成26年６月に調査票を送付し，郵送による自記式の質問紙調査を行った。少年院に再入院していることが確認できた者（平成26年12月20日から27年２月28日までの期間に少年院に在院した者に限る。以下，この節において「少年院再入院者」という。）に対しては，再入院先の少年院に協力を依頼し，平成26年12月に少年院に調査票を送付した。その際，調査への参加は任意であること，調査への回答が今後の処遇に影響を与えたり，個人の回答が特定されたりすることはないことを書面で明示した上で，質問紙への回答を求めた。

２　調査内容

調査回答時点及び少年院出院時における以下の項目について調査を実施した。ただし，少年院再入院者には，再入院直前の状況について振り返って回答するよう求めた。

調査内容は，先行研究を参考に，立ち直りに関係すると考えられる項目を選定した。具体的には，生活習慣，生活形態，対人関係に関する項目のほか，心理的特徴についても複数の観点から取り上げた。

（1）　生活習慣

過去１年間の飲酒，喫煙，クラブ・サークル活動及びボランティア活動への参加の頻度に関して，「ほぼ毎日」，「週に数回」，「週に一回程度」，「月に一回程度」，「年に数回」，「年に一回程

度」,「まったくしていない」の選択肢から回答を求めた。今回の分析においては，選択肢を統合し,「ほぼ毎日」,「週１～数回」,「月１回以下」の３区分で集計した。

（2） 生活形態

生活形態については，主に就学及び就労に注目し，客観的な状況と主観的な受け止めを問う質問を設定した。

ア　客観的な状況

（ア） 就学・就労状況

就学状況については，最後に通っていた学校の種別のほか,「在学中」,「卒業した」,「中退した」の選択肢から回答を求めた。就労状況については,「正社員」,「派遣社員」,「パート・アルバイト」,「自営業」,「家業」,「仕事はしていない」から回答を求めた。今回の分析においては，就学状況と就労状況を統合した「就学・就労状況」を設けた。まず，就学状況について「在学中」とした者を「就学中」とし，就学状況で「卒業した」又は「中退した」とした者のうち，就労状況について「仕事はしていない」とした者を「無職」，それ以外の者を「有職」とした。

（イ） 生活費を得る方法

「自分が仕事をして得た収入」,「家族等の収入や仕送り」,「公的年金」,「生活保護」の選択肢から回答を求めた。

イ　主観的な受け止め

（ア） 職業生活に関する満足度

安達（1998）の職場環境，職務内容，給与に関する満足感測定尺度を参考に，職務内容について,「私の仕事は『やりがいのある仕事をした』という感じが得られる」,「私の仕事ぶりは職場のみんなから認められている」,「今の仕事は私に適している」の３項目，給与について,「私の給与は私の年齢，地位にふさわしい」,「私の生活に必要なものを確保するために現在の収入は足りている」の２項目，職場の人間関係について,「私の同僚は仕事のうえで協力的である」,「私の上司は，仕事における指導監督ぶりが適切である」の２項目を設定し,「そう思う（４点)」,「どちらかといえばそう思う（３点)」,「どちらかといえばそう思わない（２点)」,「そう思わない（１点)」の選択肢から回答を求めた。

職務内容，給与，職場の人間関係のそれぞれについて回答を合計して得点化し，得点が高い

ほど満足度が高いとみなした。

（イ） 生活形態に関する肯定的感情

「学校に行くこと」及び「仕事をすること」を今，楽しいと感じているかという設問に，「とても感じる」，「まあ感じる」，「あまり感じない」，「まったく感じない」，「自分にはあてはまらない」の選択肢から回答を求めた。今回の分析においては，「とても感じる」及び「まあ感じる」を「該当」として，「あまり感じない」及び「まったく感じない」を「非該当」として集計し，「自分にはあてはまらない」と回答した者を除いた。

（ウ） 生活形態に関する困難

過去１年間に，「仕事を見つけること又は進学（復学）」及び「仕事又は学校を続けること」について，問題になったことや困ったことがあったか，それぞれ，「とてもあてはまる」，「ややあてはまる」，「あまりあてはまらない」，「まったくあてはまらない」の選択肢から回答を求めた。今回の分析においては，「とてもあてはまる」及び「ややあてはまる」を「該当」として，「あまりあてはまらない」及び「まったくあてはまらない」を「非該当」として集計した。

（３） 対人関係

対人関係については，主に家族及び友人関係に注目し，客観的な状況と主観的な受け止めを問う質問を設定した。

ア 客観的な状況

（ア） 同居者

同居している者について，「一人暮らし」，「父親」，「母親」，「祖父又は祖母」，「兄弟姉妹」，「配偶者」，「交際相手」，「子ども」，「その他」の選択肢から複数回答を許容して回答を求めた。今回の分析においては，「一人暮らし」を「同居者なし」とし，それ以外を「同居者あり」に統合して集計した。

（イ） 結婚・交際

結婚・交際状況について，「結婚している（事実婚を含む）」，「結婚していないが，交際相手がいる」，「結婚しておらず，交際相手もいない」の選択肢から回答を求めた。

（ウ） 他者との食事の機会

過去１年間の家族との夕食の頻度及び友人との会食や集まりの頻度について，「ほぼ毎日」，「週に数回」，「週に一回程度」，「月に一回程度」，「年に数回」，「年に一回程度」，「まったくして

いない」の選択肢から回答を求めた。今回の分析においては，選択肢を統合し，「ほぼ毎日」，「週１～数回」，「月１回以下」の３区分で集計した。

（エ）　健全な友人関係

Van der Geest et al.（2009）による，社会的に望ましい行動と関連する友人との接触は低非行群と高非行群を分ける有効な要因であるという指摘を参考に，友人との向社会的な活動を問う項目として，「学校や仕事に一生懸命打ち込んでいた」，「クラブやサークル活動に励んでいた」の２項目を設定した。過去１年間の友人関係について振り返って，友人のうちどのくらいの人があてはまるか，「全員（５点）」，「ほとんど全員（４点）」，「する人もしない人もいる（３点）」，「ほとんどいない（２点）」，「まったくいない（１点）」の選択肢から回答を求めた。２項目の回答を合計して得点化し，得点が高いほど，友人関係の健全性が高いとみなした。

（オ）　非行性のある友人関係

Thornberry et al.（1994）で用いられている，周囲の友人の非行・犯罪行為について尋ねる尺度を参考に，文化的な要因を考慮し，本邦において現実的に生じうる非行・犯罪行為として，「免許をとっていないのに，自動車・バイク・スクーターに乗った」，「理由もないのに，学校や仕事を丸１日さぼった」，「自分のものでないものを，わざとこわしたり，傷つけたり，燃やしたりした（らくがきもふくむ）」，「勝手に入ってはいけない場所や建物に入った」，「あなたに法律に禁じられているような悪いことをするように勧めた」の５項目を設定した。過去１年間の友人関係について振り返って，友人のうちどのくらいの人があてはまるか，「全員（５点）」，「ほとんど全員（４点）」，「する人もしない人もいる（３点）」，「ほとんどいない（２点）」，「まったくいない（１点）」の選択肢から回答を求めた。５項目の回答を合計して得点化し，得点が高いほど，友人関係の非行性が高いとみなした。

イ　主観的な受け止め

（ア）　他者と過ごすことに関する肯定的感情

「家族と一緒にいること」及び「友人と一緒にいること」を，今，楽しいと感じているかという設問に，「とても感じる」，「まあ感じる」，「あまり感じない」，「まったく感じない」，「自分にはあてはまらない」の選択肢から回答を求めた。今回の分析においては，「とても感じる」及び「まあ感じる」を「該当」として，「あまり感じない」及び「まったく感じない」を「非該当」として集計し，「自分にはあてはまらない」と回答した者を除いた。

（イ） 他者からのサポートを感じる程度

自身へのサポートを感じる程度に関して，堤ら（2000）の地域住民用ソーシャルサポート尺度を参考として，「あなたに何か困ったことがあって，自分の力ではどうしようもないとき，助けてくれる」，「あなたが経済的に困っているときに，頼りになる」，「引越しをしなければならなくなったときに，手伝ってくれる」，「あなたの喜びを我がことのように喜んでくれる」の４項目を設定し，配偶者，配偶者以外の家族，友人のそれぞれについて，「非常にそう思う（４点）」，「まあそう思う（３点）」，「あまりそうは思わない（２点）」，「まったくそうは思わない（１点）」，「配偶者はいない（０点）」（「家族はいない（０点）」，「友人はいない（０点）」）の選択肢から回答を求めた。それぞれ４項目の回答を合算して得点化し，得点が高いほど，サポートを感じる程度が高いとみなした。

（ウ） 対人関係の困難

過去１年間に，「家族とうまく生活していくこと」，「以前の不良仲間からの誘い」，「非行や犯罪に関わっていない友だちを作ること」，「被害者への謝罪や被害弁償」，「周囲の人から少年院に入ったことで悪く見られたり，言われたりすること」について，問題になったことや困ったことがあったか，それぞれ「とてもあてはまる」，「ややあてはまる」，「あまりあてはまらない」，「まったくあてはまらない」の選択肢から回答を求めた。今回の分析においては，「とてもあてはまる」及び「ややあてはまる」を「該当」として，「あまりあてはまらない」及び「まったくあてはまらない」を「非該当」として集計した。

（４） 心理的特徴

ア 自己肯定感

「非行少年と保護者に関する研究」（法務総合研究所，2014）において用いられた質問項目を用いた。「自分の努力がだんだん実ってきている」，「自分は頼りにされている」，「自分には打ち込んでいるものがある」，「自分は何をやってもだめな人間だ」（逆方向に測定する項目であり，得点を逆転させて集計。以下「逆転項目」），「自分は世の中から取り残されている」（逆転項目），「自分の性格がいやになる」（逆転項目）の６項目について，それぞれ，「よく感じる（４点）」，「ときどき感じる（３点）」，「あまり感じない（２点）」，「まったく感じない（１点）」の選択肢から回答を求めた。６項目の回答を合計して得点化し，得点が高いほど，自己肯定感が高いとみなした。

イ　低セルフコントロール

自己の行動を制御する力の程度を見るため，Grasmick et al.（1993）の低セルフコントロール尺度（24項目）から鈴木ら（1996）に倣い，「私は，あれこれ考えず，その場のいきおいで行動することが多い」，「私は，スリルを味わいたくて，ときどき危険なことをする」などの10項目を抜粋した。「よくあてはまる（４点）」，「ややあてはまる（３点）」，「あまりあてはまらない（２点）」，「まったくあてはまらない（１点）」の選択肢から回答を求め，合算して得点化し，得点が高いほど，セルフコントロールの程度が低いとみなした。

ウ　内的統制傾向

自己の行動によって物事の結果を統制できるという信念の程度を見るため，鎌原・樋口・清水（1982）の Locus of Control 尺度（18項目）から Internal 項目と External 項目それぞれについて，「あなたは，努力すれば，どんなことでも自分の力でできると思いますか」，「あなたは，何でも，なりゆきにまかせるのが一番だと思いますか」（逆転項目）など，４項目ずつを抜粋した。「そう思う（４点）」，「ややそう思う（３点）」，「ややそう思わない（２点）」，「そう思わない（１点）」の選択肢から回答を求め，合算して得点化し，得点が高いほど，内的統制傾向が高いとみなした。

エ　目標指向性，希望，過去受容

過去及び未来についての捉え方，すなわち，過去に関する受容及び未来に関する希望や目標を有している程度を見るため，白井（1994）の時間的展望体験尺度の下位尺度である「目標指向性」尺度５項目，「過去受容」尺度４項目，「希望」尺度４項目から，「私には，だいたいの将来計画がある」（目標指向性），「私の将来には，希望がもてる」（希望），「過去のことはあまり思い出したくない」（逆転項目）（過去受容）など，３項目ずつを抜粋した。「あてはまる（５点）」，「どちらかといえばあてはまる（４点）」，「どちらともいえない（３点）」「どちらかといえばあてはまらない（２点）」，「あてはまらない（１点）」の選択肢から回答を求め，合算して得点化し，それぞれ得点が高いほど，目標指向性等が高いとみなした。

（5）　基本的背景

調査対象者の基本的背景に関する情報として，出院時状況調査（第３章参照）の結果から，本件非行名，少年鑑別所入所回数，保護観察歴，少年院送致歴及び初発非行時期を使用した。

（6） 更生意欲

Bottoms & Shapland（2011）による青年期の立ち直りに関する面接調査の質問を参考に，調査対象者の更生意欲を問う項目として，「法律で禁じられているような『悪い』ことについて，あなたの現在の考えに一番近いと思う答えを一つ選んでください」という項目を設定し，「すでにやめており，今後もすることはない」，「まだやめていないが，絶対にやめるつもりだ」，「やめようと思っているが，やめられるかどうか自信がない」，「やめるつもりはない」の選択肢から回答を求めた。

3 調査の結果

調査の結果については，以下のとおりである。

平成26年10月末までに社会内で調査に回答した者は72人（男子60人，女子12人）であった。このうち，少年院出院から調査時点までに，少年院に再入院した者又は受刑者として刑事施設に入所した者はいなかった。社会内で調査に回答した72人のうち，「更生意欲」の質問項目において，「法律で禁じられているような『悪い』こと」を「すでにやめており，今後もすることはない」又は「まだやめていないが，絶対にやめるつもりだ」と回答した者を更生意欲があるとみなし，「デシスタンス群」（男子58人，女子11人）として分析した。

少年院に再入院し，在院中であることが確認できた者のうち，調査に回答した者47人を「再入院群」（男子46人，女子１人）として分析した。

非行・犯罪からの立ち直りの指標には様々なものが考えられるが，今回は，「社会内で調査に回答しており，調査時点までに再入院又は受刑者としての刑事施設への入所がないこと」を基準の一つとした（第３章１節２項（２）参照）。加えて，ここでは対象者の更生意欲についても確認することで，より厳密に立ち直りを定義している。

なお，無回答については，項目ごとに分析から除外した。また，クロス表分析等において統計的検定を行った場合，本研究では有意水準を５％に設定し，検定結果は図表中に付記した。

（1） 属性

各群の分析対象者の年齢は，**4-1-3-1表**のとおりである。分析対象者全体の調査回答時の年齢は15歳から22歳であり，平均年齢について，デシスタンス群は18.1歳，再入院群は18.5歳であった。出院時の年齢層別に見ると，デシスタンス群では，年少少年（15歳以下）が21.7%（15人），中間少年（16歳・17歳）が53.6%（37人），年長少年（18歳以上）が24.6%（17人）であった。一方，再入院群では，年少少年が19.1%（９人），中間少年が63.8%（30人），年長少年が17.0%（８人）であった。

4-1-3-1表　年齢別人員

年　齢	出院時				調査時			
	デシスタンス群		再入院群		デシスタンス群		再入院群	
総　数	69	(100.0)	47	(100.0)	69	(100.0)	47	(100.0)
14 歳	2	(2.9)	—		—		—	
15 歳	13	(18.8)	9	(19.1)	1	(1.4)	—	
16 歳	21	(30.4)	9	(19.1)	8	(11.6)	—	
17 歳	16	(23.2)	21	(44.7)	18	(26.1)	11	(23.4)
18 歳	8	(11.6)	8	(17.0)	19	(27.5)	10	(21.3)
19 歳	4	(5.8)	—		13	(18.8)	18	(38.3)
20 歳	5	(7.2)	—		4	(5.8)	8	(17.0)
21 歳	—		—		4	(5.8)	—	
22 歳	—		—		2	(2.9)	—	

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　（　）内は，総数に対する構成比である。

（2） 非行歴

平成25年１月から同年３月までの期間に少年院を出院した時点での非行歴については，以下のとおりである。

分析対象者の本件非行名は，**4-1-3-2表**のとおりである。両群共に，窃盗及び傷害の占める割合が高く，デシスタンス群では窃盗21.7%（15人），傷害24.6%（17人），再入院群では窃盗51.1%（24人），傷害19.1%（９人）であった。また，それら以外の非行は，デシスタンス群では53.6%（37人），再入院群では29.8%（14人）であった。

4-1-3-2表　非行名別人員

非行名	デシスタンス群		再入院群	
総数	69	(100.0)	47	(100.0)
刑法犯	62	(89.9)	41	(87.2)
放火	2	(2.9)	1	(2.1)
住居侵入	1	(1.4)	—	
強制わいせつ	6	(8.7)	1	(2.1)
強姦	5	(7.2)	—	
殺人	1	(1.4)	—	
傷害	17	(24.6)	9	(19.1)
脅迫	1	(1.4)	—	
窃盗	15	(21.7)	24	(51.1)
強盗	5	(7.2)	3	(6.4)
詐欺	1	(1.4)	—	
恐喝	2	(2.9)	1	(2.1)
自動車運転過失致死傷	1	(1.4)	1	(2.1)
その他	5	(7.2)	1	(2.1)
特別法犯	5	(7.2)	5	(10.6)
覚せい剤取締法	2	(2.9)	—	
道路交通法	3	(4.3)	5	(10.6)
ぐ犯	2	(2.9)	1	(2.1)

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　「非行名」は，平成25年１月から同年３月までに出院した少年院の少年院送致決定に係る非行名による。
　　3　（　）内は，構成比である。

分析対象者の少年鑑別所入所回数は，デシスタンス群では，１回が62.3%（43人）と最も割合が高く，２回が27.5%（19人），３回が7.2%（５人），４回が2.9%（２人）であった。再入院群では，１回及び２回が共に36.2%（17人）と最も割合が高く，３回が19.1%（９人），４回が8.5%（４人）であった。

保護観察歴を見ると，デシスタンス群では，保護観察歴なしが65.2%（45人），１回が21.7%（15人），２回が11.6%（８人），３回以上が1.4%（１人）であった。再入院群では，保護観察歴なしが38.3%（18人），１回が53.2%（25人），２回が8.5%（４人）であり，３回以上はいなかった。

少年院送致歴を見ると，デシスタンス群では，平成25年１月から同年３月までの期間に出院した少年院が初めての少年院送致（少年院送致歴なし）の割合が91.3%（63人）と大半を占め，今回以前にも少年院送致歴のある割合は8.7%（６人）であった。再入院群も，少年院送致歴なしの割合が83.0%（39人）と大半を占め，今回以前にも少年院送致歴ありの割合は17.0%（８人）であった。

初発非行の時期を見ると，デシスタンス群では，中学入学以前が43.5%（30人），中学入学以降が56.5%（39人）であった。再入院群では，中学入学以前が46.8%（22人），中学入学以降が53.2%（25人）であった。

群別に属性等を一覧にしたものは，**4-1-3-3表**のとおりである。カイ２乗検定を行ったところ有意な差が認められたものとして，デシスタンス群は，再入院群に比して，女性の割合が高く，非行名における窃盗の割合が低い一方でその他の割合が高く，少年鑑別所入所回数が１回の割合が高く，保護観察歴なしの割合が高かった。

4-1-3-3表　属性・非行歴（デシスタンス群・再入院群別）

属性等	区分	デシスタンス群	再入院群	χ^2 値	p 値
性別	男子	58 (84.1)	46 (97.9)	5.75	.016
	女子	11 (15.9)	1 (2.1)		
年齢層	年少少年	15 (21.7)	9 (19.1)	1.35	.510
	中間少年	37 (53.6)	30 (63.8)		
	年長少年	17 (24.6)	8 (17.0)		
非行名	窃盗	15 (21.7)	24 (51.1)	11.14	.004
	傷害	17 (24.6)	9 (19.1)		
	その他	37 (53.6)	14 (29.8)		
少年鑑別所入所回数	1回	43 (62.3)	17 (36.2)	7.66	.006
	2回以上	26 (37.7)	30 (63.8)		
保護観察歴	なし	45 (65.2)	18 (38.3)	8.16	.004
	あり	24 (34.8)	29 (61.7)		
少年院送致歴	なし	63 (91.3)	39 (83.0)	1.83	.177
	あり	6 (8.7)	8 (17.0)		
初発非行時期	中学入学以前	30 (43.5)	22 (46.8)	0.13	.723
	中学入学以降	39 (56.5)	25 (53.2)		

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　「年齢層」は，出院時の年齢による。
　　3　「非行名」は，平成25年１月から同年３月までに出院した少年院の少年院送致決定に係る非行名による。
　　4　（　）内は，デシスタンス群の総数，再入院群の総数に占める構成比である。
　　5　p 値は，χ^2 検定による漸近有意確率である。なお，「性別」について，Fisher の直接法による正確有意確率は p ＝.026であった。

（3）　生活習慣

生活習慣を調査した結果は，**4-1-3-4図**のとおりである。飲酒習慣については，デシスタンス群では，「月１回以下」の割合が83.8%（57人）と大半を占め，「週１～数回」の割合が14.7%（10人），「ほぼ毎日」の割合が1.5%（１人）であった。「月１回以下」の割合は，再入院群

（29.8%，14人）に比して有意に高く，逆に，「週１～数回」及び「ほぼ毎日」の割合は，再入院群（それぞれ38.3%，18人及び31.9%，15人）に比して有意に低かった。

なお，飲酒習慣について，調査時に20歳未満であった者に限った場合，デシスタンス群では，「月１回以下」の割合が89.7%（52人），「週１～数回」の割合が8.6%（５人），「ほぼ毎日」の割合が1.7%（１人）であり，再入院群では，「月１回以下」の割合が28.2%（11人），「週１～数回」の割合が43.6%（17人），「ほぼ毎日」の割合が28.2%（11人）であった。

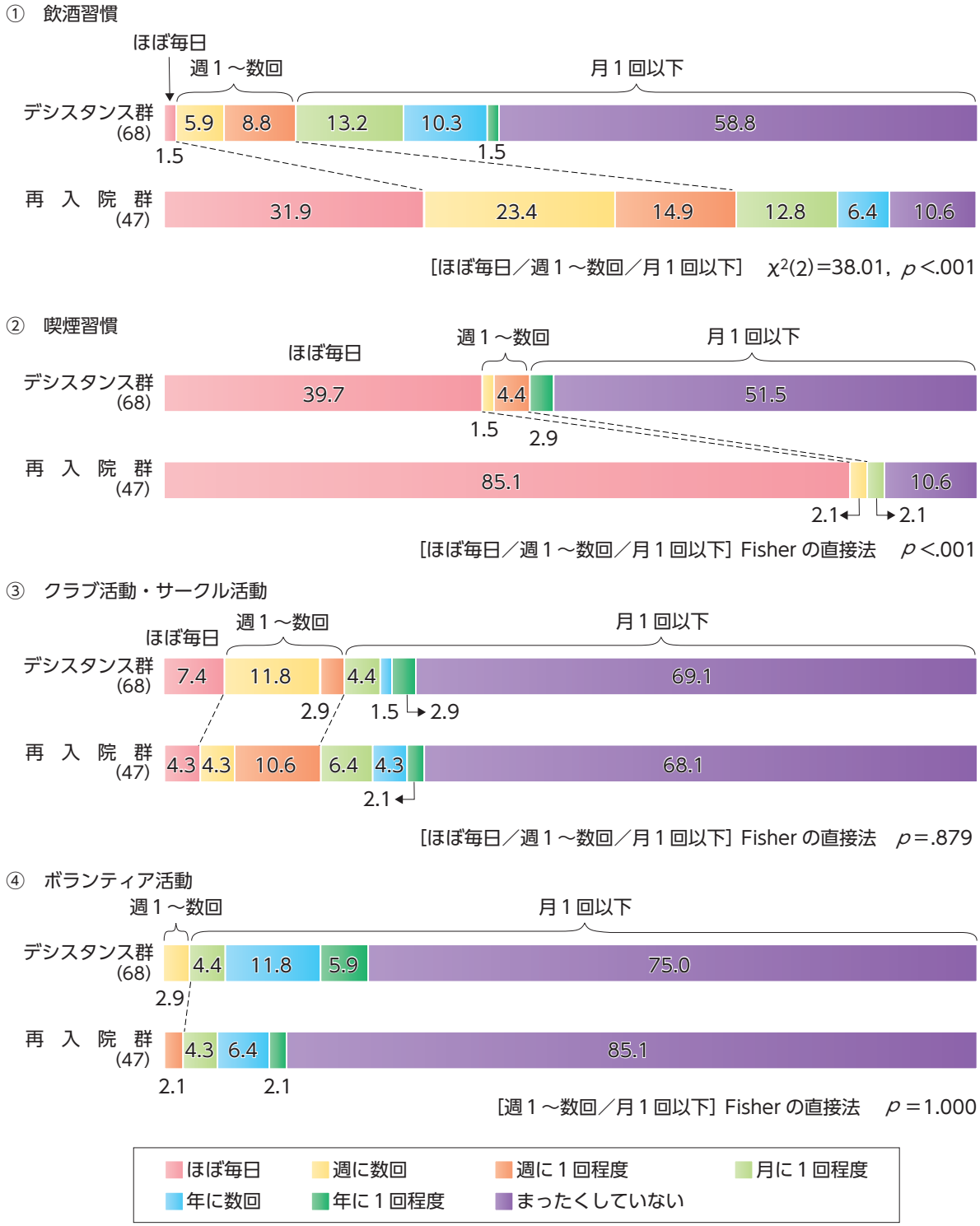
喫煙習慣については，デシスタンス群では，「月１回以下」の割合が54.4%（37人）と最も多く，「週１～数回」の割合が5.9%（４人），「ほぼ毎日」の割合が39.7%（27人）であった。「月１回以下」の割合は，再入院群（12.8%，６人）に比して有意に高く，逆に，「ほぼ毎日」の割合は，再入院群（85.1%，40人）に比して有意に低かった。

なお，喫煙習慣について，調査時に20歳未満であった者に限った場合，デシスタンス群では，「月１回以下」の割合が62.1%（36人），「週１～数回」の割合が5.2%（３人），「ほぼ毎日」の割合が32.8%（19人）であり，再入院群では，「月１回以下」の割合が15.4%（６人），「週１～数回」の割合が2.6%（１人），「ほぼ毎日」の割合が82.1%（32人）であった。

クラブやサークル活動への参加状況について，デシスタンス群では，「月１回以下」の割合が77.9%（53人）と最も多く，「週１～数回」の割合が14.7%（10人），「ほぼ毎日」の割合が7.4%（５人）であり，再入院群との間に有意な差は認められなかった。

ボランティア活動への参加状況について，デシスタンス群では，「月１回以下」の割合が97.1%（66人）と大半を占め，「週１～数回」の割合が2.9%（２人）であり，再入院群との間に有意な差は認められなかった。

4-1-3-4図　生活習慣（デシスタンス群・再入院群別）



注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　無回答の者を除く。
　　3　（　）内は，実人員である。

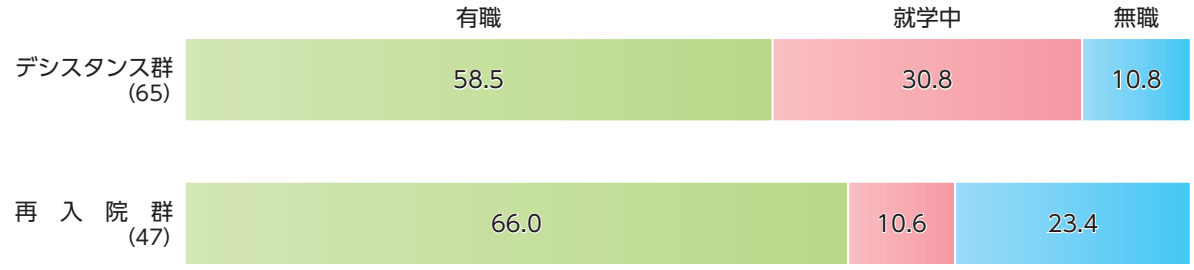
（4） 生活形態

ア 客観的な状況

（ア） 就学・就労状況

就学・就労状況を調査した結果は，**4-1-3-5図**のとおりである。デシスタンス群では，「有職」の割合が58.5％（38人），「就学中」の割合が30.8％（20人），「無職」の割合が10.8％（７人）であった。「就学中」の割合は，再入院群（10.6％，５人）に比して有意に高かった。

4-1-3-5図　就学・就労状況（デシスタンス群・再入院群別）



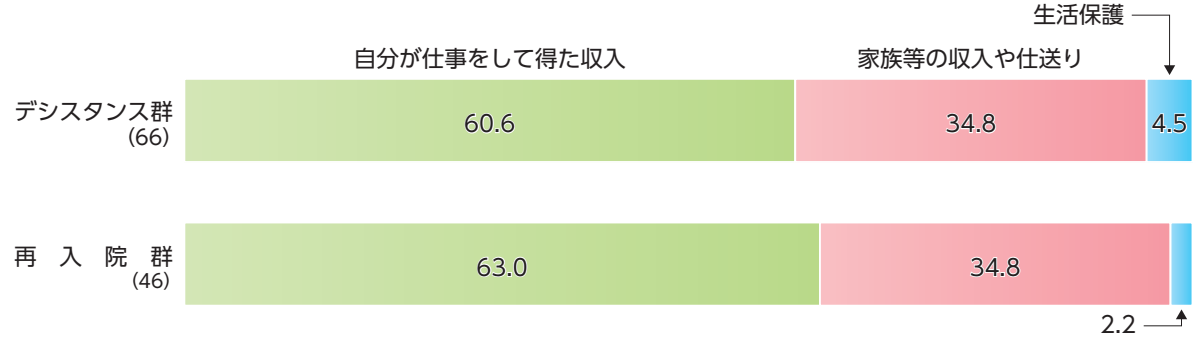
$\chi^2(2)=7.91$，$p=.019$

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　無回答の者を除く。
　　3　（　）内は，実人員である。

（イ） 生活費を得る方法

生活費を得る方法を調査した結果は，**4-1-3-6図**のとおりである。デシスタンス群では，「自分が仕事をして得た収入」の割合が60.6％（40人），「家族等の収入や仕送り」の割合が34.8％（23人），「生活保護」の割合が4.5％（３人）であり，再入院群との間に有意な差は認められなかった。

4-1-3-6図　生活費を得る方法（デシスタンス群・再入院群別）



Fisher の直接法　$p=.942$

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　無回答の者を除く。
　　3　（　）内は，実人員である。

イ　主観的な受け止め

（ア）　職業生活に関する満足度

就学・就労状況が「有職」の者について，職業生活に関する満足度を調査した結果については，**4-1-3-7図**のとおりである。職務内容に関する満足度に関する３項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値が8.62であり，再入院群の平均値（8.23）との間に有意な差は認められなかった。デシスタンス群では，「私の仕事は『やりがいのある仕事をした』という感じが得られる」という項目に「そう思う」と回答した者の割合が39.5％（15人）であった。

給与に関する満足度に関する２項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値が5.51であり，再入院群の平均値（4.97）との間に有意な差は認められなかった。デシスタンス群では，「私の生活に必要なものを確保するために現在の収入は足りている」という項目に「そう思う」と回答した者の割合が26.3％（10人）であった。

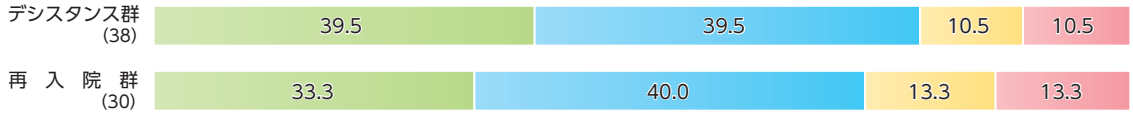
職場の人間関係に関する満足度に関する２項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値が6.22であり，再入院群の平均値（5.97）との間に有意な差は認められなかった。デシスタンス群では，「私の同僚は仕事のうえで協力的である」という項目に「そう思う」と回答した者の割合が40.5％（15人）であった。

4-1-3-7図　職業生活に関する満足度（デシスタンス群・再入院群別）

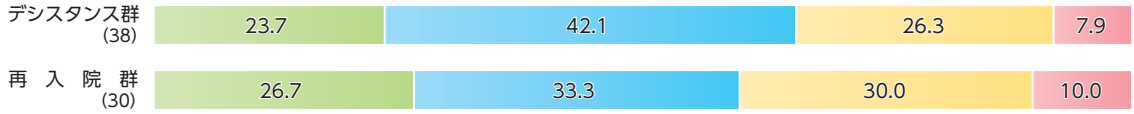
① 職務内容に関する満足

デシスタンス群　8.62(SD=2.59)，再入院群　8.23(SD=2.75)，t (65)=.59, p =.555

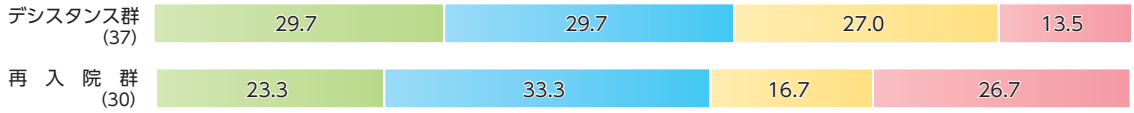
ア　私の仕事は「やりがいのある仕事をした」という感じが得られる



イ　私の仕事ぶりは職場のみんなから認められている



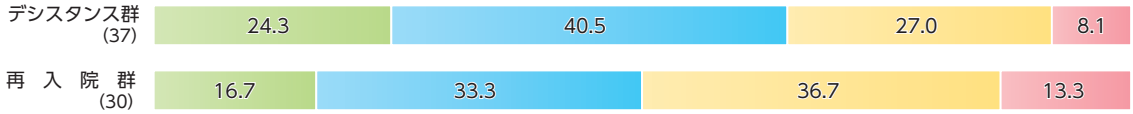
ウ　今の仕事は私に適している



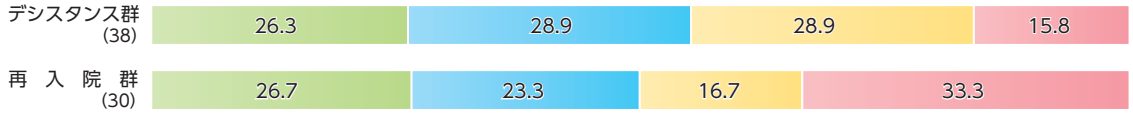
② 給与に関する満足

デシスタンス群　5.51(SD=1.74)，再入院群　4.97(SD=1.63)，t (65)=1.32, p =.193

ア　私の給与は私の年齢，地位にふさわしい



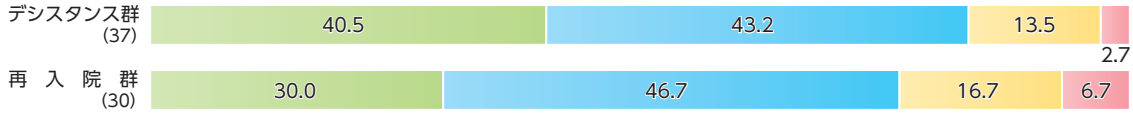
イ　私の生活に必要なものを確保するために現在の収入は足りている



③ 職場の人間関係に関する満足

デシスタンス群　6.22(SD=1.34)，再入院群　5.97(SD=1.56)，t (65)=.70, p =.484

ア　私の同僚は仕事のうえで協力的である



イ　私の上司は，仕事における指導監督ぶりが適切である

そう思う　どちらかといえばそう思う　どちらかといえばそう思わない　そう思わない

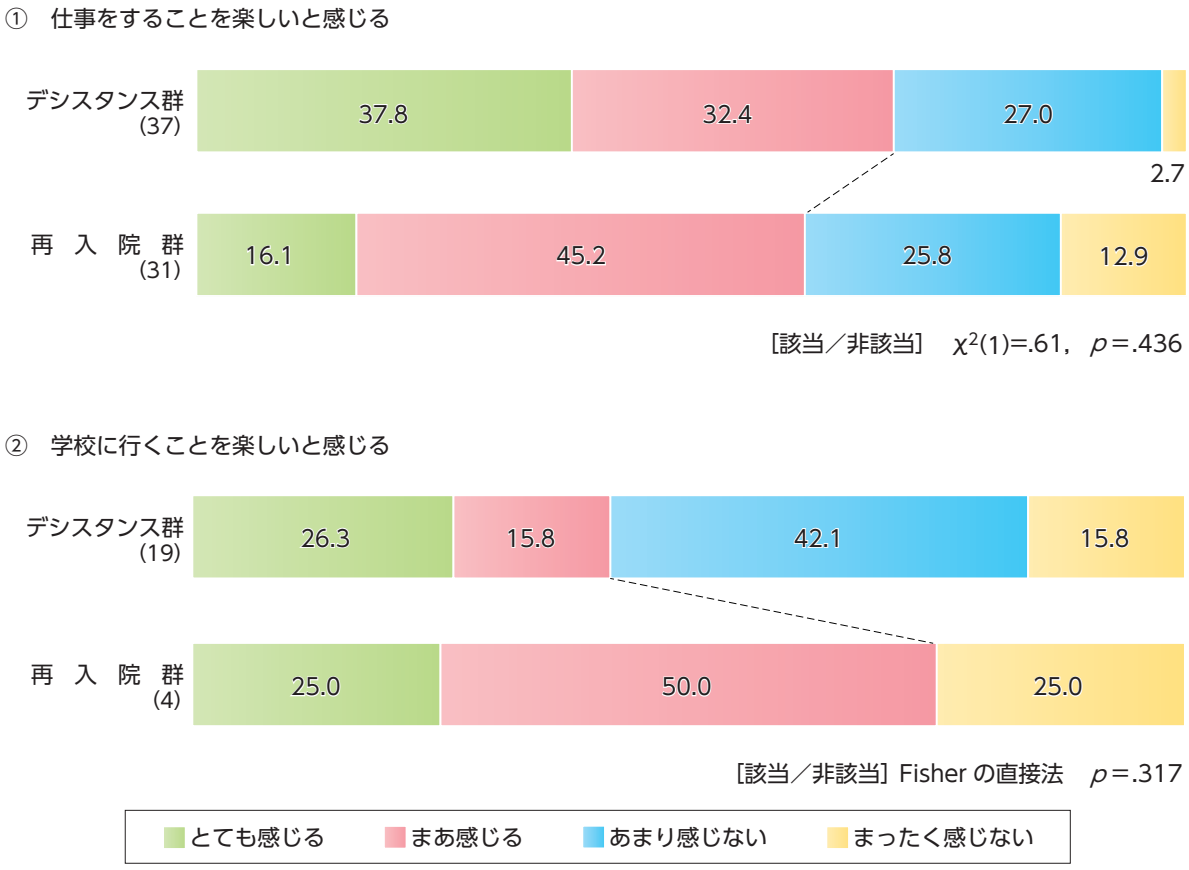
注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　就学・就労状況が「有職」の者に限り，無回答の者を除く。
　　3　（　）内は，実人員である。

（イ） 生活形態に関する肯定的感情

仕事をすること及び学校に行くことを楽しいと感じる程度を調査した結果については，**4-1-3-8図**のとおりである。就学・就労状況が「有職」の者のうち，デシスタンス群では，仕事が楽しいと感じている者の割合が70.3%（26人）であり，再入院群（61.3%，19人）との間に有意な差は認められなかった。

就学・就労状況が「就学中」の者のうち，デシスタンス群では，学校が楽しいと感じている者の割合が42.1%（８人）であり，再入院群（75.0%，３人）との間に有意な差は認められなかった。

4-1-3-8図　生活形態に関する肯定的感情（デシスタンス群・再入院群別）



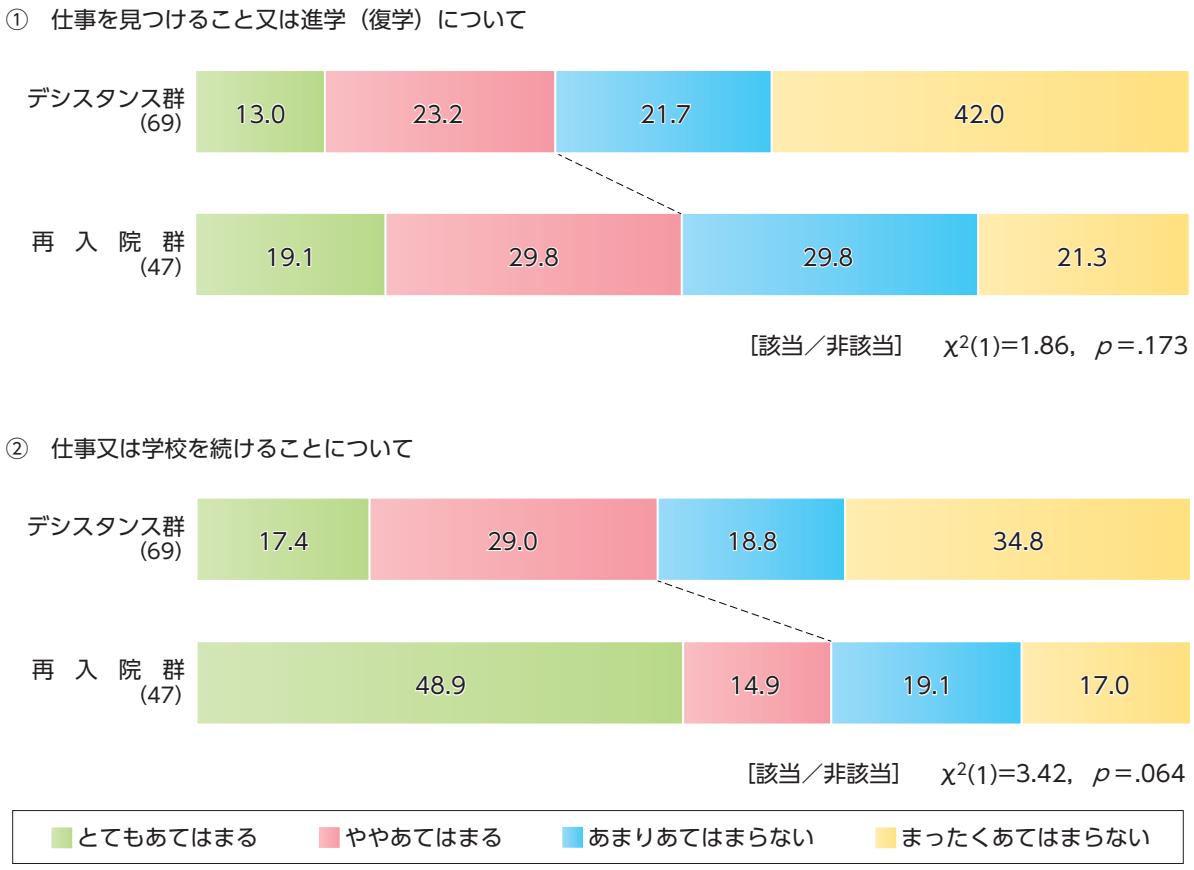
注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　①では，就学・就労状況が「有職」の者に限り，②では，就学・就労状況が「就学中」の者に限る。
　　3　無回答の者及び「自分には当てはまらない」と回答した者を除く。
　　4　（　）内は，実人員である。

（ウ） 生活形態に関する困難

就職・進学及び仕事・学校の継続について困難を感じる程度を調査した結果は，**4-1-3-9図**のとおりである。過去１年間の生活の中で仕事を見つけること又は進学（復学）について問題になったことや困ったことがあったと回答した者の割合は，デシスタンス群では36.2％（25人）であり，再入院群（48.9％，23人）との間に有意な差は認められなかった。

過去１年間の生活の中で仕事又は学校を続けることについて問題になったことや困ったことがあったと回答した者の割合は，デシスタンス群では46.4％（32人）であり，再入院群（63.8％，30人）との間に有意な差は認められなかった。ただし，再入院群では，「とてもあてはまる」と回答した者の割合が48.9％（23人）と約半数を占めるのに対し，デシスタンス群では，17.4％（12人）であった。

4-1-3-9図　生活形態に関する困難（デシスタンス群・再入院群別）



注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　（　）内は，実人員である。

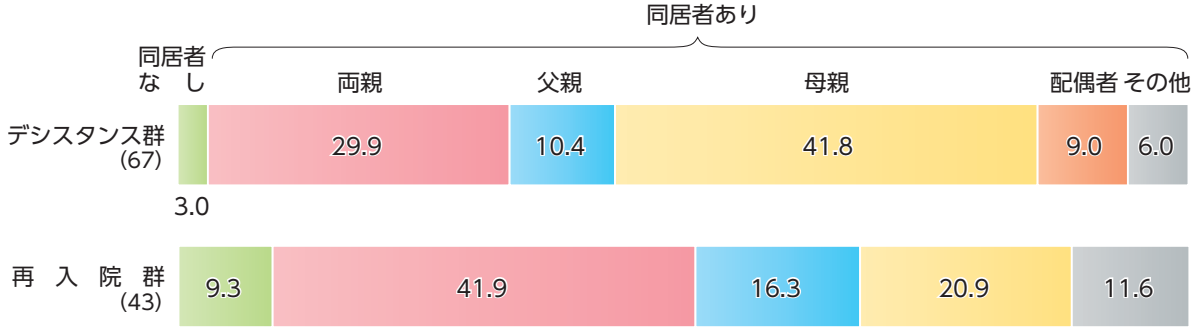
（5） 対人関係

ア 客観的な状況

（ア） 同居者

同居者の状況を調査した結果は，**4-1-3-10図**のとおりである。デシスタンス群では，「同居者あり」の割合が97.0%（65人）と大半を占め，再入院群（90.7%，39人）との間に有意な差は認められなかった。同居者の内訳の上位３位は，デシスタンス群では，母親41.8%（28人），両親29.9%（20人），父親10.4%（７人），再入院群では，両親41.9%（18人），母親20.9%（９人），父親16.3%（７人）であった。

4-1-3-10図　同居者（デシスタンス群・再入院群別）



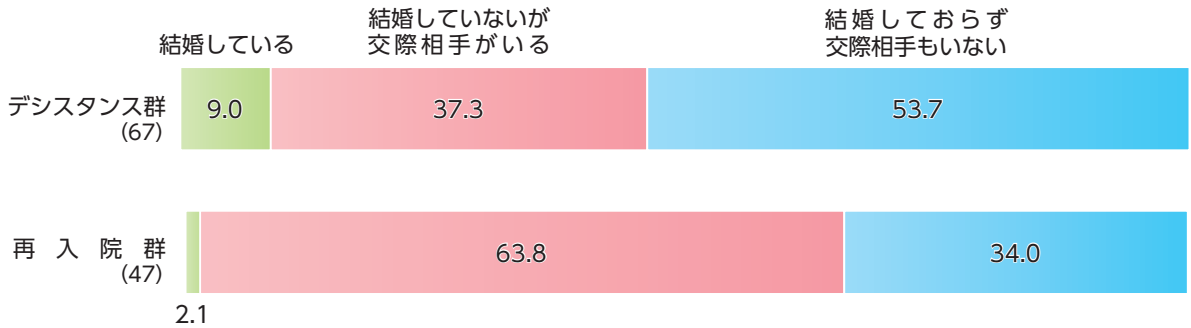
［同居者なし／同居者あり］Fisher の直接法　p =.207

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　無回答の者を除く。
　　3　（　）内は，実人員である。

（イ） 結婚・交際

結婚・交際に関する状況を調査した結果は，**4-1-3-11図**のとおりである。デシスタンス群では，「結婚しておらず，交際相手もいない」の割合が53.7％（36人），「結婚していないが交際相手がいる」の割合が37.3％（25人），「結婚している」の割合が9.0％（６人）であった。「結婚しておらず，交際相手もいない」の割合は，再入院群（34.0％，16人）に比して有意に高く，逆に，「結婚していないが，交際相手がいる」の割合は，再入院群（63.8％，30人）に比して有意に低かった。

4-1-3-11図　結婚・交際状況（デシスタンス群・再入院群別）



Fisher の直接法　p＝.015

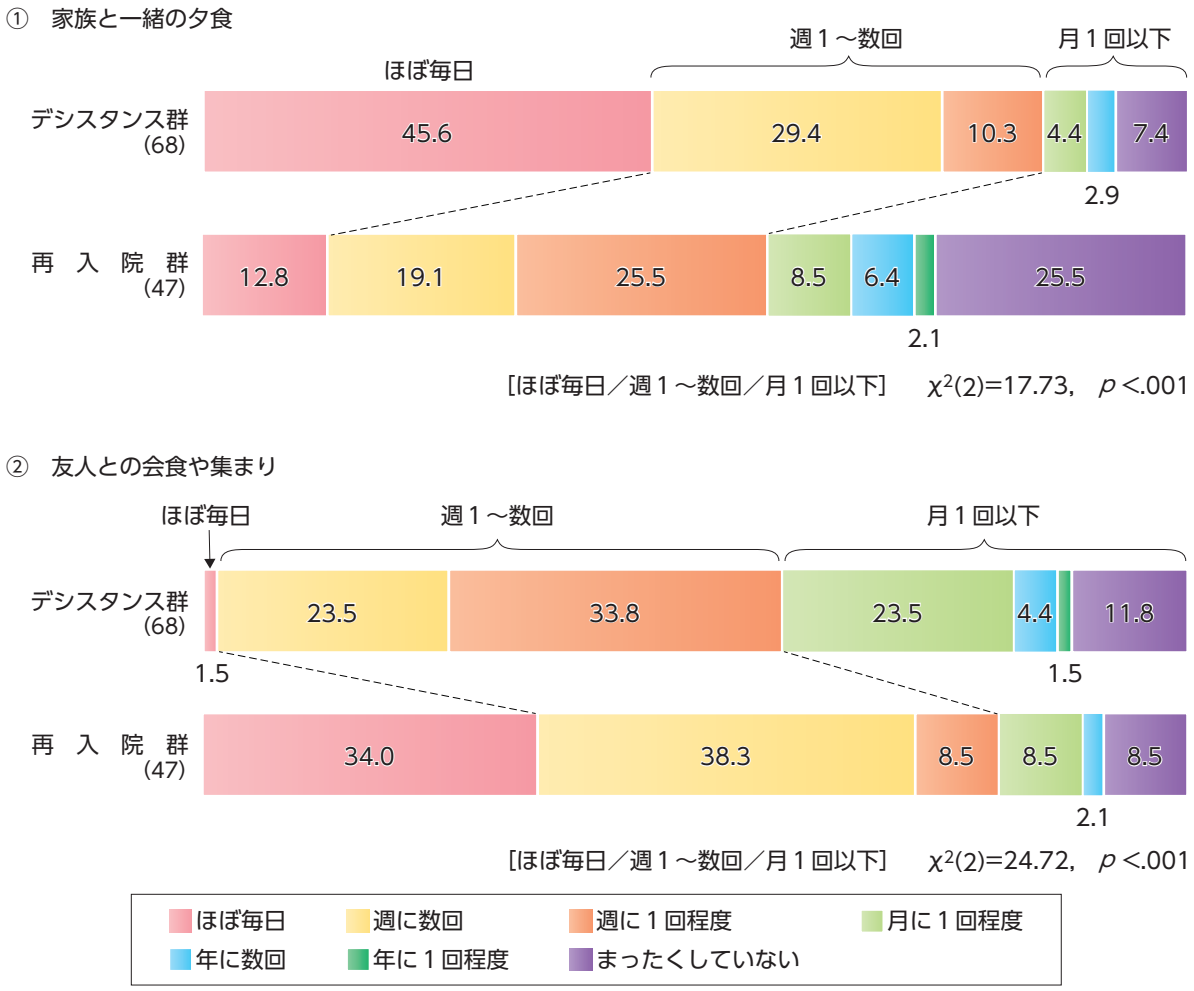
注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　無回答の者を除く。
　　3　「結婚している」は，事実婚の場合を含む。
　　4　（　）内は，実人員である。

（ウ） 他者との食事の機会

他者との食事の機会を調査した結果は，**4-1-3-12図**のとおりである。家族との夕食頻度について，デシスタンス群では，「ほぼ毎日」の割合が45.6％（31人），「週１～数回」の割合が39.7％（27人），「月１回以下」の割合が14.7％（10人）であった。「ほぼ毎日」の割合は，再入院群（12.8％，６人）に比して有意に高く，逆に，「月１回以下」の割合は，再入院群（42.6％，20人）に比して有意に低かった。

友人との会食や集まりの頻度について，デシスタンス群では，「ほぼ毎日」の割合が1.5％（１人），「週１～数回」の割合が57.4％（39人），「月１回以下」の割合が41.2％（28人）であった。「ほぼ毎日」の割合は，再入院群（34.0％，16人）に比して有意に低く，逆に，「月１回以下」の割合は，再入院群（19.1％，９人）に比して有意に高かった。

4-1-3-12図　他者との食事機会（デシスタンス群・再入院群別）

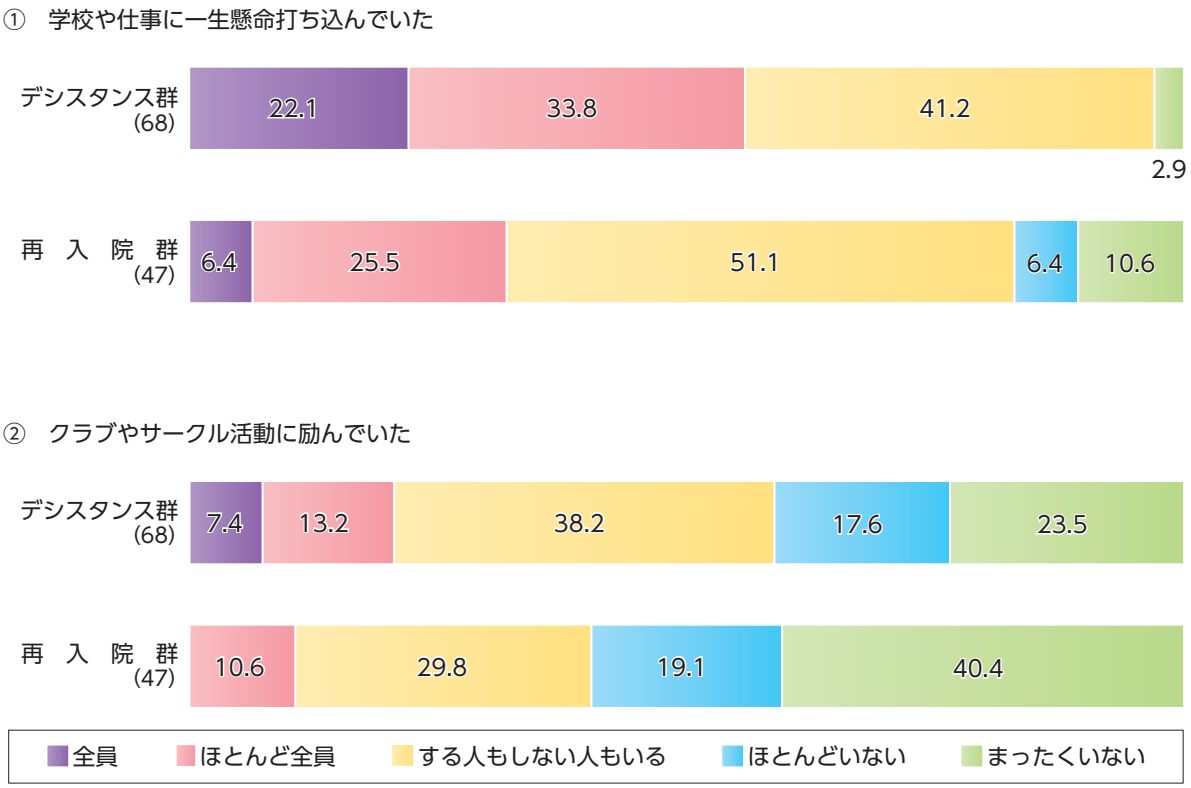


注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　無回答の者を除く。
　　3　（　）内は，実人員である。

（エ） 健全な友人関係

健全な友人関係を調査した結果は，**4-1-3-13図**のとおりである。デシスタンス群では，友人の「全員」又は「ほとんど全員」が「学校や仕事に一生懸命に打ち込んでいた」と回答した者の割合が半数を超えているが，再入院群では，約３割にとどまっていた。健全な友人関係に関する２項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値は6.35であり，再入院群の平均値（5.21）に比して有意に高かった。

4-1-3-13図　健全な友人関係（デシスタンス群・再入院群別）



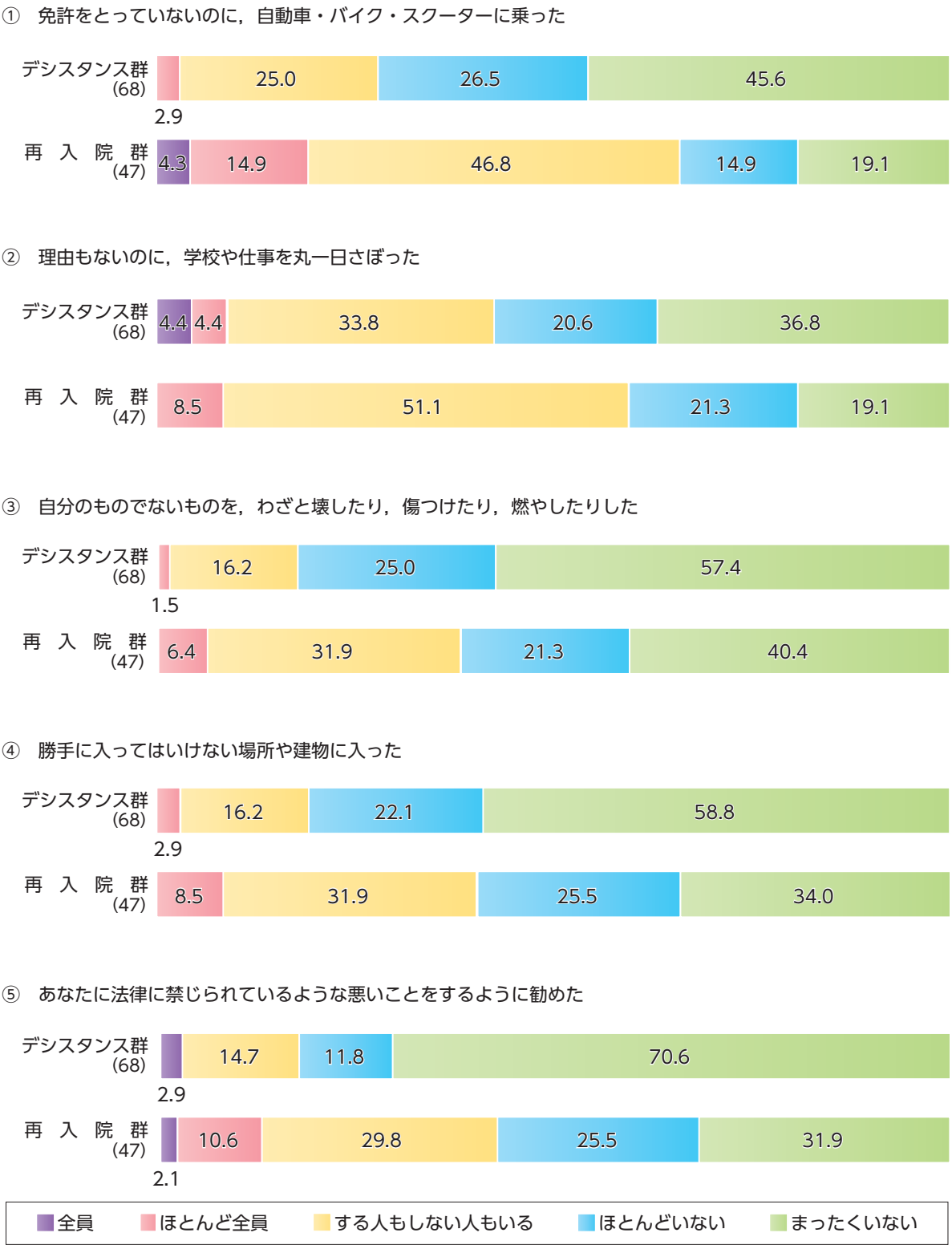
デシスタンス群　6.35（SD=1.72），再入院群　5.21（SD=1.81），$t(113)=3.43$，$p<.001$

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　無回答の者を除く。
　　3　（　）内は，実人員である。

（オ） 非行性のある友人関係

非行性のある友人関係を調査した結果は，**4-1-3-14図**のとおりである。デシスタンス群では，友人の「全員」又は「ほとんど全員」が「免許をとっていないのに，自動車・バイク・スクーターに乗った」と回答した者の割合が2.9%（２人）と少数であった一方，再入院群では，19.1%（９人）であった。また，「あなたに法律に禁じられているような悪いことをするように勧めた」について「まったくない」と回答した者の割合は，デシスタンス群では70.6%（48人）であったが，再入院群では31.9%（15人）であった。非行性のある友人関係に関する５項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値は8.82であり，再入院群の平均値（11.64）に比して有意に低かった。

4-1-3-14図　非行性のある友人関係（デシスタンス群・再入院群別）



デシスタンス群　8.82(SD=3.68)，再入院群　11.64(SD=4.00)，$t(113)=3.89$，$p<.001$

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　無回答の者を除く。
　　3　（　）内は，実人員である。

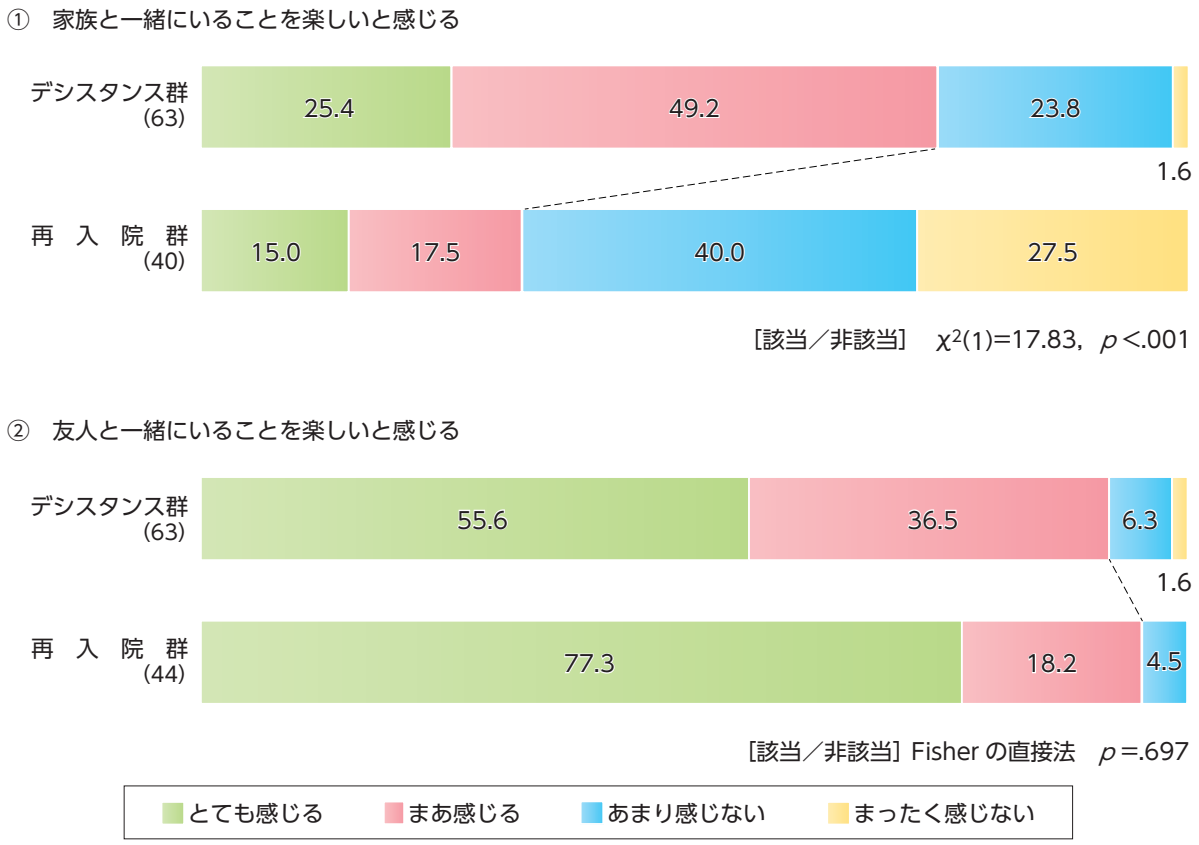
イ　主観的な受け止め

（ア）　他者と過ごすことに関する肯定的感情

家族及び友人と過ごすことに関する肯定的感情を調査した結果は，**4-1-3-15図**のとおりである。家族と一緒にいることが楽しいと感じている者の割合は，デシスタンス群では74.6%（47人）と大半を占めたが，再入院群では32.5%（13人）にとどまり，デシスタンス群の方が有意に高かった。

友人と一緒にいることが楽しいと感じている者の割合は，デシスタンス群では92.1%（58人），再入院群では95.5%（42人）といずれも大半を占め，両群の間に有意な差は認められなかった。

4-1-3-15図　他者と過ごすことに関する肯定的感情（デシスタンス群・再入院群別）



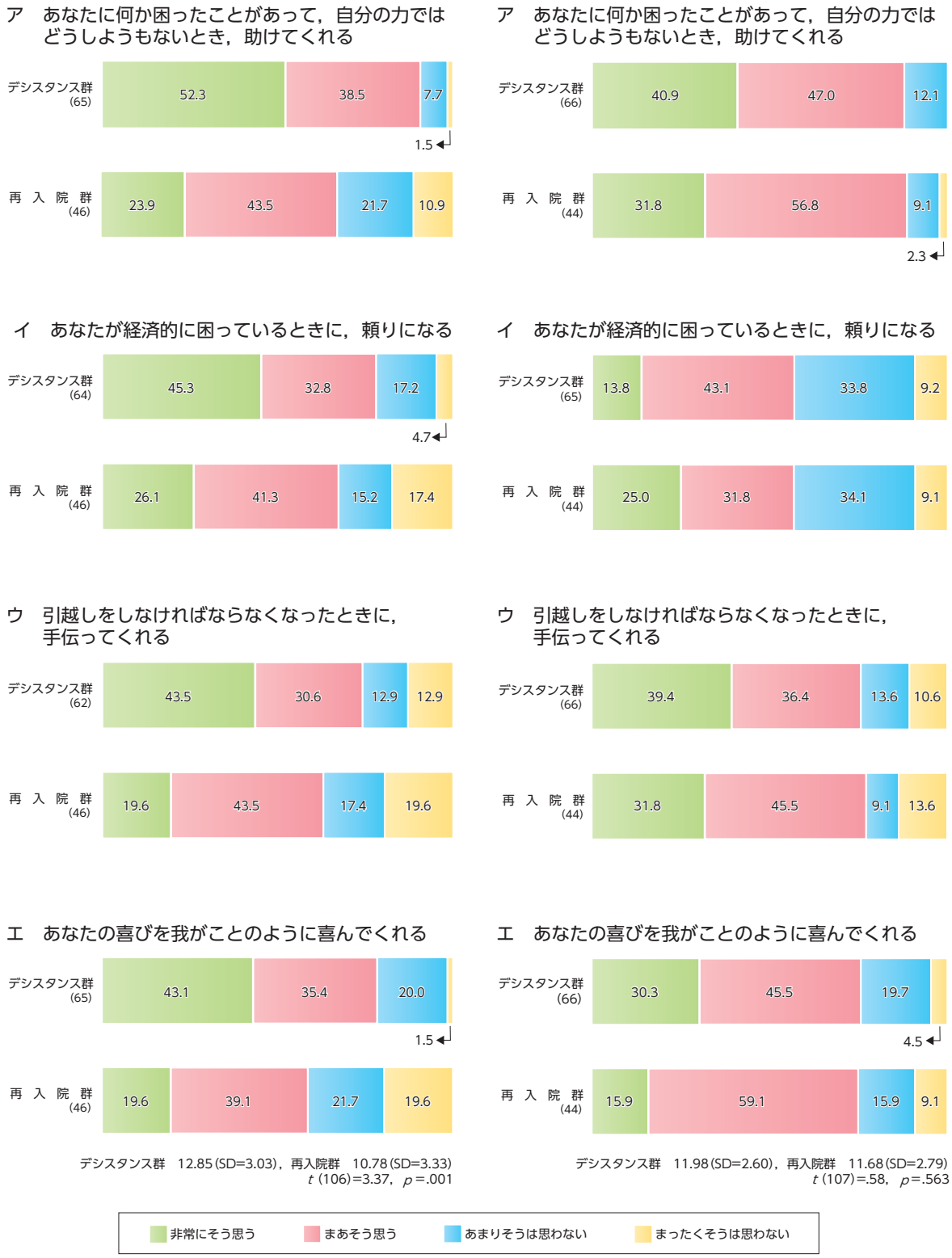
注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　無回答の者及び「自分にはあてはまらない」と回答した者を除く。
　　3　（　）内は，実人員である。

（イ） 他者からのサポートを感じる程度

自身へのサポートを感じる程度を，サポートしてくれる相手別に調査した結果は，**4-1-3-16図**のとおりである。配偶者以外の家族からのサポートについて，「あなたに何か困ったことがあって，自分の力ではどうしようもないとき，助けてくれる」という項目に「非常にそう思う」と回答した者の割合は，デシスタンス群では52.3%（34人），再入院群では23.9%（11人）であった。４項目の合計得点の平均値は，デシスタンス群では12.85であり，再入院群の平均値（10.78）に比して有意に高かった。

友人からのサポートについて，「あなたに何か困ったことがあって，自分の力ではどうしようもないとき，助けてくれる」という項目に「非常にそう思う」と回答した者の割合は，デシスタンス群では40.9%（27人），再入院群では31.8%（14人）であった。４項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値は11.98であり，再入院群（11.68）との間に有意な差は認められなかった。

4-1-3-16図　他者からのサポートを感じる程度（デシスタンス群・再入院群別）

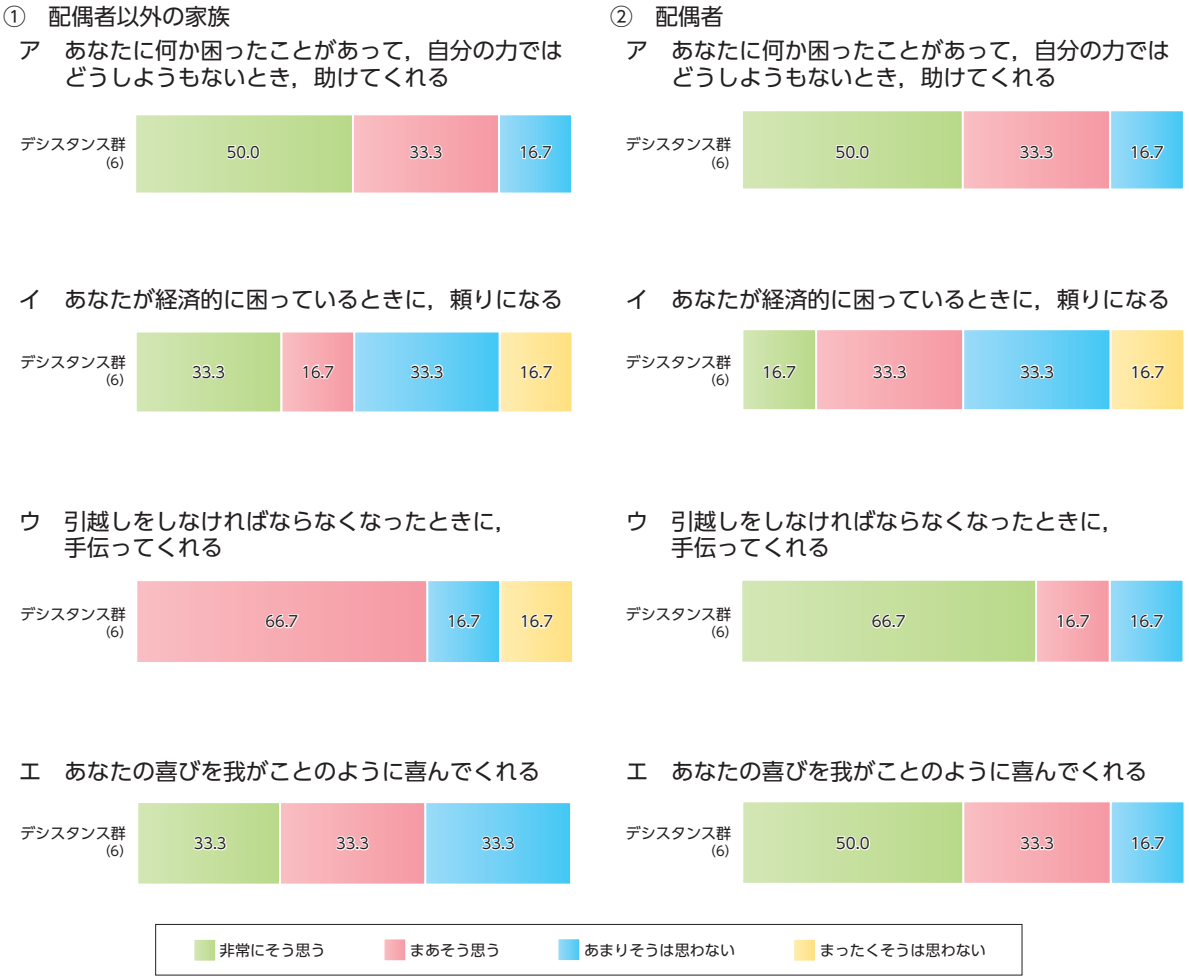


注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　無回答の者，①において「家族はいない」と回答した者及び②において「友人はいない」と回答した者を除く。
　　3　（　）内は，実人員である。

配偶者がいる者について，配偶者からのサポートと配偶者以外の家族からのサポートをそれぞれ調査した結果は，**4-1-3-17図**のとおりである。「引越しをしなければならなくなったときに，手伝ってくれる」という項目に「非常にそう思う」と回答した者の割合は，配偶者以外の家族では該当者なしであった一方，配偶者では66.7%（４人）であった。

なお，再入院群については，配偶者のいる者が１名のみであったため，集計していない。

4-1-3-17図　他者からのサポートを感じる程度（配偶者ありデシスタンス群）



注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　配偶者ありと回答した者に限る。
　　3　（　）内は，実人員である。

（ウ） 対人関係の困難

対人関係の困難を調査した結果は，**4-1-3-18図**のとおりである。

過去１年間に家族とうまく生活していくことについて問題になったことや困ったことがあったと回答した者の割合は，デシスタンス群では31.9%（22人）であり，再入院群（55.3%，26人）に比して，有意に低かった。

過去１年間に被害者への謝罪や被害弁償について問題になったことや困ったことがあったと回答した者の割合は，デシスタンス群では37.7%（26人）であり，再入院群（19.1%，９人）に比して，有意に高かった。

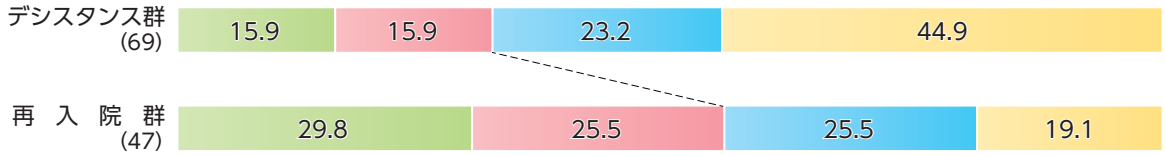
過去１年間に以前の不良仲間からの誘いについて問題になったことや困ったことがあったと回答した者の割合は，デシスタンス群では20.3%（14人）であり，再入院群（40.4%，19人）に比して，有意に低かった。

過去１年間に非行や犯罪に関わっていない友だちを作ることについて問題になったことや困ったことがあったと回答した者の割合は，デシスタンス群では24.6%（17人）であり，再入院群（46.8%，22人）に比して，有意に低かった。

過去１年間に周囲の人から少年院に入ったことで悪く見られたり，言われたりすることについて問題になったことや困ったことがあったと回答した者の割合は，デシスタンス群では21.7%（15人）であり，再入院群（27.7%，13人）との間に有意な差は認められなかった。

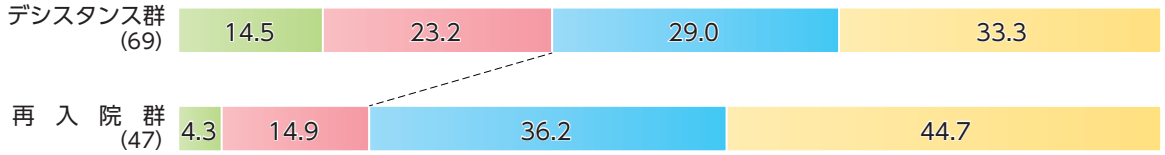
4-1-3-18図　対人関係の困難（デシスタンス群・再入院群別）

① 家族とうまく生活していくことについて



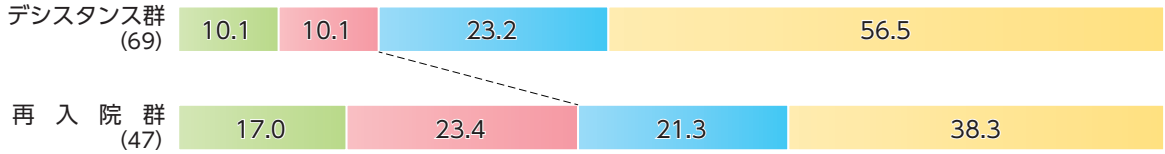
[該当／非該当]　$\chi^2(1)=6.33$，$p=.012$

② 被害者への謝罪や被害弁償について



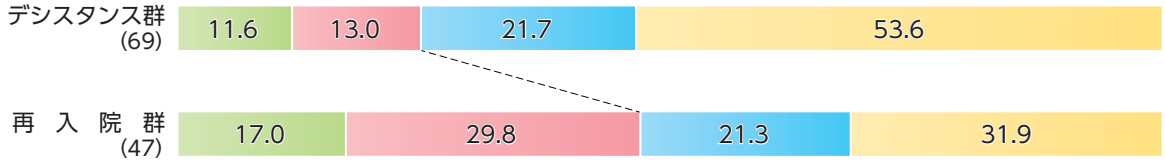
[該当／非該当]　$\chi^2(1)=4.56$，$p=.033$

③ 以前の不良仲間からの誘いについて



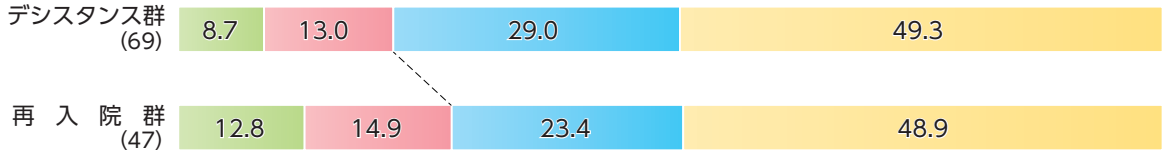
[該当／非該当]　$\chi^2(1)=5.57$，$p=.018$

④ 非行や犯罪に関わっていない友だちを作ることについて



[該当／非該当]　$\chi^2(1)=6.16$，$p=.013$

⑤ 周囲の人から少年院に入ったことで悪く見られたり，言われたりすることについて



[該当／非該当]　$\chi^2(1)=.54$，$p=.464$

とてもあてはまる　ややあてはまる　あまりあてはまらない　まったくあてはまらない

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　（　）内は，実人員である。

（6） 心理的特徴

心理的特徴を調査した結果は，**4-1-3-19表**のとおりである。

自己肯定感について，「自分には打ち込んでいるものがある」という項目に「よく感じる」と回答した者の割合は，デシスタンス群では41.2%（28人）である一方，再入院群では17.0%（８人）であった。６項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値は16.91であり，再入院群（13.89）に比して，有意に高かった。

低セルフコントロールについて，「私は，スリルを味わいたくて，ときどき危険なことをする」という項目に「よくあてはまる」と回答した者の割合は，デシスタンス群では2.9%（２人）である一方，再入院群では43.5%（20人）であった。10項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値は21.68であり，再入院群（28.63）に比して，有意に低かった。

内的統制傾向について，「あなたが幸福になるか不幸になるかは，あなたの努力しだいだと思いますか」という項目に「そう思う」と回答した者の割合は，デシスタンス群では56.5%（39人）である一方，再入院群では33.3%（15人）であった。８項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値は23.74であり，再入院群（20.38）に比して，有意に高かった。

「目標指向性」について，「私には，だいたいの将来計画がある」という項目に「あてはまる」と回答した者の割合は，デシスタンス群では36.2%（25人）である一方，再入院群では6.4%（３人）であった。３項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値は11.67であり，再入院群（8.45）に比して，有意に高かった。

「希望」について，「私の将来には，希望がもてる」という項目に「あてはまる」と回答した者の割合は，デシスタンス群では24.6%（17人）である一方，再入院群では10.6%（５人）であった。３項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値は11.17であり，再入院群（8.96）に比して，有意に高かった。

「過去受容」について，「過去のことはあまり思い出したくない」という項目に「あてはまる」と回答した者の割合は，デシスタンス群では24.6%（17人）である一方，再入院群では29.8%（14人）であった。３項目の合計得点について，デシスタンス群の平均値は9.04であり，再入院群（7.87）との間に有意な差は認められなかった。

4-1-3-19表　心理的特徴（デシスタンス群・再入院群別）

項目	デシスタンス群			再入院群			t 値	p 値
	平均	(標準偏差)	人員	平均	(標準偏差)	人員		
自己肯定感	16.91	(4.04)	66	13.89	(3.87)	47	3.98	<.001
低セルフコントロール	21.68	(6.06)	68	28.63	(6.22)	46	5.95	<.001
内的統制傾向	23.74	(4.02)	69	20.38	(5.04)	45	3.76	<.001
時間的展望								
目標指向性	11.67	(2.88)	69	8.45	(3.28)	47	5.59	<.001
希望	11.17	(2.88)	69	8.96	(3.45)	47	3.75	<.001
過去受容	9.04	(3.22)	69	7.87	(3.27)	47	1.91	.059

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　無回答の者を除く。

第２節　一般青少年との比較

１　調査対象者及び方法

少年院出院後に立ち直った者が同年代の一般青少年と比較してどのような傾向を有しているのかを検討するため，一般青少年を対象とした調査を実施した。一般青少年の調査対象者として，全国の満16歳以上の少年800名を住民基本台帳等に基づく層化二段無作為抽出法により選定し，平成26年６月に調査票を送付し，郵送による自記式の質問紙調査を行った。その際，調査への参加は任意であること，個人の回答が特定されることはない旨を書面で明示した上で，質問紙への回答を求めた。

２　調査内容

調査内容は，非行歴がない場合に回答が困難である一部項目（対人関係の困難のうち，「以前の不良仲間からの誘い」，「被害者への謝罪や被害弁償」など）を除き，少年院出院者に対する調査と同じものとした。

３　調査の結果

調査の結果については，以下のとおりである。本節は，少年院出院後に立ち直った者が同年代の一般青少年と比較してどのような傾向を有しているのかを検討することが目的であるため，主として，デシスタンス群の特徴に関する結果について言及する。

平成26年10月末までに調査に回答した者は260名（男子120名，女子140人）であった。

なお，無回答については，項目ごとに分析から除外した。また，クロス表分析等において統計的検定を行った場合，本研究では有意水準を５％に設定し，検定結果は図表中に付記した。

（1） 属性

一般青少年群（以下「一般群」）の調査回答時の年齢は，16歳から22歳で，平均年齢は18.6歳であった（デシスタンス群は18.1歳，再入院群は18.5歳）。

（2） 生活習慣

生活習慣について調査した結果は，**4-2-3-1表**のとおりである。

飲酒習慣について，デシスタンス群は，一般群とほぼ同じであった。

喫煙習慣について，デシスタンス群は，「ほぼ毎日」の割合が一般群より高く，再入院群より低かった。

クラブ・サークル活動への参加について，デシスタンス群は，「ほぼ毎日」の割合が一般群より低く，再入院群より高かった。

ボランティア活動への参加について，３群の間に顕著な差は認められなかった。

4-2-3-1表　生活習慣（一般群・デシスタンス群・再入院群別）

項目	区分	デシスタンス群		一般群		再入院群		χ^2 値	p 値
飲酒習慣	ほぼ毎日	1	(1.5)	—		15	(31.9)	125.77	<.001
	週1～数回	10	(14.7)	35	(13.7)	18	(38.3)		
	月1回以下	57	(83.8)	220	(86.3)	14	(29.8)		
喫煙習慣	ほぼ毎日	27	(39.7)	15	(5.9)	40	(85.1)	165.85	<.001
	週1～数回	4	(5.9)	4	(1.6)	1	(2.1)		
	月1回以下	37	(54.4)	235	(92.5)	6	(12.8)		
クラブ活動 サークル活動	ほぼ毎日	5	(7.4)	51	(20.0)	2	(4.3)	17.52	.002
	週1～数回	10	(14.7)	56	(22.0)	7	(14.9)		
	月1回以下	53	(77.9)	148	(58.0)	38	(80.9)		
ボランティア活動	ほぼ毎日	—		1	(0.4)	—		0.69	.952
	週1～数回	2	(2.9)	5	(2.0)	1	(2.1)		
	月1回以下	66	(97.1)	249	(97.6)	46	(97.9)		

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　（　）内は，デシスタンス群，一般群，再入院群それぞれの総数に占める構成比である。
　　3　p 値は，χ^2 検定による漸近有意確率である。なお，「飲酒習慣」，「喫煙習慣」，「ボランティア活動」について，Fisher の直接法による正確有意確率は，それぞれ $p<.001$，$p<.001$，$p=.902$ であった。

（3） 生活形態

生活形態について調査した結果は，**4-2-3-2表**のとおりである。

就学・就労状況について，デシスタンス群及び再入院群は「有職」の割合が高く，一般群は「就学中」の割合が高かった。

生活費を得る方法について，デシスタンス群及び再入院群は「自分が仕事をして得た収入」の割合が高く，一般群は「家族等の収入や仕送り」の割合が高かった。

就学・就労状況が「有職」の者のうち，職業生活に関する満足度について，職務内容，給与及び職場の人間関係のいずれにおいても，３群の間に有意な差は認められなかった。

就学・就労状況が「有職」の者のうち，仕事をすることを楽しいと感じている者の割合について群間で比較をしたところ，３群の間に有意な差は認められなかった。

就学・就労状況が「就学中」の者のうち，学校に行くことを楽しいと感じている者の割合について群間で比較をしたところ，デシスタンス群は低いのに対し，一般群は高かった。

過去１年間に仕事を見つけること又は進学（復学）について問題になったことや困ったことがあったと回答した者の割合について群間で比較をしたところ，３群の間に有意な差は認められなかった。

過去１年間に仕事又は学校を続けることについて問題になったことや困ったことがあったと回答した者の割合について群間で比較をしたところ，デシスタンス群及び再入院群は高く，一般群は低かった。ただし，デシスタンス群では，その割合は５割に満たなかった。

4-2-3-2表　生活形態（一般群・デシスタンス群・再入院群別）

① 区分別人員

項目	区分	デシスタンス群		一般群		再入院群		χ^2 値	p 値
就学・就労	有職	38	(58.5)	43	(17.3)	31	(66.0)	130.31	<.001
	就学中	20	(30.8)	202	(81.5)	5	(10.6)		
	無職	7	(10.8)	3	(1.2)	11	(23.4)		
生活費を得る方法	自分の収入	40	(60.6)	39	(15.2)	29	(63.0)	87.26	<.001
	家族の収入	23	(34.8)	214	(83.6)	16	(34.8)		
	生活保護	3	(4.5)	3	(1.2)	1	(2.2)		
生活形態に関する肯定的感情									
仕事をすること	該当	26	(70.3)	29	(70.7)	19	(61.3)	0.87	.648
	非該当	11	(29.7)	12	(29.3)	12	(38.7)		
学校に行くこと	該当	8	(42.1)	149	(77.2)	3	(75.0)	11.10	.004
	非該当	11	(57.9)	44	(22.8)	1	(25.0)		
生活形態に関する困難									
仕事を見つけること・進学	該当	25	(36.2)	112	(45.0)	23	(48.9)	2.25	.325
	非該当	44	(63.8)	137	(55.0)	24	(51.1)		
仕事・学校を続けること	該当	32	(46.4)	48	(19.4)	30	(63.8)	47.27	<.001
	非該当	37	(53.6)	199	(80.6)	17	(36.2)		

② 平均得点

項目	デシスタンス群（37人）		一般群（43人）		再入院群（30人）		F 値	p 値
職業生活に関する満足度								
職務内容	8.62	(2.59)	8.70	(2.03)	8.23	(2.75)	0.31	.733
給与	5.51	(1.74)	5.51	(1.80)	4.97	(1.63)	1.08	.344
職場の人間関係	6.22	(1.34)	6.51	(1.39)	5.97	(1.56)	1.33	.269

注　1　法務総合研究所の調査による。
2　①の（　）内は，デシスタンス群，一般群，再入院群それぞれの総数に占める構成比である。
3　①の「仕事をすること」は，就学・就労状況が「有職」の者に限り，「学校に行くこと」は，就学・就労状況が「就学中」の者に限る。
4　①における p 値は，χ^2 検定による漸近有意確率である。なお，「就学・就労」，「生活費を得る方法」及び「学校に行くこと」について，Fisher の直接法による正確有意確率は，それぞれ $p<.001$，$p<.001$，$p=.006$ であった。
5　②は，就学・就労状況が「有職」の者に限る。
6　②の（　）内は，標準偏差である。
7　②の「職務内容」については，等分散性が認められなかったため，Welch の検定を行った。

（4） 対人関係

対人関係について調査した結果は，**4-2-3-3表**のとおりである。

同居者について，３群の間に有意な差は認められなかった。

結婚・交際状況について群間で比較をしたところ，デシスタンス群及び一般群は「結婚しておらず，交際相手もいない」の割合が高いのに対し，再入院群は「結婚していないが，交際相手がいる」割合が高かった。

家族との夕食頻度について群間で比較をしたところ，デシスタンス群は「ほぼ毎日」の割合が，再入院群よりも一般群に近かった。

友人との会食や集まりの頻度について群間で比較をしたところ，デシスタンス群は「週１～数回」の割合が高いのに対し，一般群は「月１回以下」の割合が高く，再入院群は「ほぼ毎日」の割合が高かった。

健全な友人関係について，デシスタンス群の平均値は，一般群との間に有意な差は認められず，再入院群よりも有意に高かった。

非行性のある友人関係について，デシスタンス群の平均値は，一般群より有意に高く，再入院群よりも有意に低かった。

家族と一緒にいることが楽しいと感じている者の割合について群間で比較をしたところ，デシスタンス群は，再入院群よりも一般群に近かった。

友人と一緒にいることが楽しいと感じている者の割合について，３群の間に有意な差は認められなかった。

配偶者以外の家族からのサポートについて，デシスタンス群の平均値は，一般群との間に有意な差は認められず，再入院群よりも有意に高かった。

友人からのサポートについて，３群の間に有意な差は認められなかった。

過去１年間に家族とうまく生活していくことについて問題になったことや困ったことがあったと回答した者の割合について群間で比較をしたところ，デシスタンス群は，再入院群よりも一般群に近かった。

4-2-3-3表　対人関係（一般群・デシスタンス群・再入院群別）

① 区分別人員

項目	区分	デシスタンス群		一般群		再入院群		χ^2 値	p 値
同居者	同居者あり	65	(97.0)	225	(88.9)	39	(90.7)	4.08	.130
	同居者なし	2	(3.0)	28	(11.1)	4	(9.3)		
結婚・交際状況	結婚している	6	(9.0)	1	(0.4)	1	(2.1)	57.02	<.001
	交際相手がいる	25	(37.3)	55	(21.6)	30	(63.8)		
	どちらもない	36	(53.7)	199	(78.0)	16	(34.0)		
他者との食事機会									
家族と一緒の夕食	ほぼ毎日	31	(45.6)	148	(58.0)	6	(12.8)	43.97	<.001
	週1～数回	27	(39.7)	78	(30.6)	21	(44.7)		
	月1回以下	10	(14.7)	29	(11.4)	20	(42.6)		
友人との会食や集まり	ほぼ毎日	1	(1.5)	15	(5.9)	16	(34.0)	57.49	<.001
	週1～数回	39	(57.4)	98	(38.6)	22	(46.8)		
	月1回以下	28	(41.2)	141	(55.5)	9	(19.1)		
他者と過ごすことに関する肯定的感情									
家族と一緒にいること	該当	47	(74.6)	215	(86.0)	13	(32.5)	57.82	<.001
	非該当	16	(25.4)	35	(14.0)	27	(67.5)		
友人と一緒にいること	該当	58	(92.1)	242	(96.0)	42	(95.5)	1.76	.414
	非該当	5	(7.9)	10	(4.0)	2	(4.5)		
対人関係の困難									
家族とうまく生活していくこと	該当	22	(31.9)	40	(16.1)	26	(55.3)	35.86	<.001
	非該当	47	(68.1)	208	(83.9)	21	(44.7)		

② 平均得点

項目	デシスタンス群			一般群			再入院群			F 値	p 値
	人員	平均	(標準偏差)	人員	平均	(標準偏差)	人員	平均	(標準偏差)		
健全な友人関係	*68*	6.35	(1.72)	*254*	6.86	(1.55)	*47*	5.21	(1.81)	21.34	<.001
非行性のある友人関係	*68*	8.82	(3.68)	*254*	7.54	(3.02)	*47*	11.64	(4.00)	23.96	<.001
他者からのサポートを感じる程度											
配偶者以外の家族からのサポート	*62*	12.85	(3.03)	*253*	13.71	(2.38)	*46*	10.78	(3.33)	17.22	<.001
友人からのサポート	*65*	11.98	(2.60)	*244*	11.34	(2.43)	*44*	11.68	(2.79)	1.80	.166

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　①の（　）内は，デシスタンス群，一般群，再入院群それぞれの総数に占める構成比である。
　　3　①における p 値は，χ^2 検定による漸近有意確率である。なお，「結婚・交際状況」及び「友人と一緒にいること」について，Fisher の直接法による正確有意確率は，それぞれ $p<.001$，$p=.388$ であった。
　　4　②の「非行性のある友人関係」及び「配偶者以外の家族からのサポート」については，等分散性が認められなかったため，Welch の検定を行った。

（5） 心理的特徴

心理的特徴について調査した結果は，**4-2-3-4表**のとおりである。

自己肯定感について，デシスタンス群の平均値は，一般群との間に有意な差は認められず，再入院群より有意に高かった。

低セルフコントロールについて，デシスタンス群の平均値は，一般群との間に有意な差は認められず，再入院群より有意に低かった。

内的統制傾向について，デシスタンス群の平均値は，一般群及び再入院群よりも有意に高かった。

目標指向性について，デシスタンス群の平均値は，一般群及び再入院群よりも有意に高かった。

希望について，デシスタンス群の平均値は，一般群との間に有意な差は認められず，再入院群より有意に高かった。

過去受容について，デシスタンス群の平均値は，一般群より有意に低く，再入院群との間に有意な差は認められなかった。

4-2-3-4表　心理的特徴（一般群・デシスタンス群・再入院群別）

項目	デシスタンス群			一般群			再入院群			*F* 値	*p* 値
	人員	平均	(標準偏差)	人員	平均	(標準偏差)	人員	平均	(標準偏差)		
自己肯定感	*66*	16.91	(4.04)	*250*	16.56	(3.68)	*47*	13.89	(3.87)	11.00	<.001
低セルフコントロール	*68*	21.68	(6.06)	*257*	20.75	(4.90)	*46*	28.63	(6.22)	32.93	<.001
内的統制傾向	*69*	23.74	(4.02)	*258*	22.19	(4.21)	*45*	20.38	(5.04)	8.50	<.001
時間的展望											
目標指向性	*69*	11.67	(2.88)	*259*	10.42	(3.34)	*47*	8.45	(3.28)	13.70	<.001
希望	*69*	11.17	(2.88)	*259*	10.77	(2.64)	*47*	8.96	(3.45)	6.96	.002
過去受容	*69*	9.04	(3.22)	*259*	10.64	(3.23)	*47*	7.87	(3.27)	18.26	<.001

注　1　法務総合研究所の調査による。
　　2　「低セルフコントロール」及び「時間的展望」の「希望」については，等分散性が認められなかったため，Welch の検定を行った。

第３節　まとめ

前節までは，少年院出院後に立ち直った者の特徴を明らかにするために実施した質問紙調査の結果を説明した。質問紙調査は，調査時点での生活状況や心理的特徴を見たものであり，立ち直りとの因果関係を調べたものではない。また，再入院群については，再入院した状態で過去の状況を振り返った調査をしており，調査状況が回答に影響を及ぼしている可能性は否定できない。これら研究手法上の制約はあるものの，本節では，少年院出院者及び一般青少年を対象として実施した質問紙調査の結果を，調査項目ごとにまとめ，少年院出院後に立ち直った者の特徴について考察を加える。

１　生活習慣

生活習慣について調査したところ，デシスタンス群は，再入院群に比して，飲酒習慣及び喫煙習慣が少ないことが示された。

分析対象者の中には，調査時に成人している者が少数ながら含まれ，成人における飲酒及び喫煙の問題性を未成年の場合と同等に扱うことはできないものの，今回の分析からは，飲酒・喫煙の習慣と非行・犯罪との間に強い関連性が認められ，立ち直りから遠ざかる指標であることが示唆された。一般群では，飲酒習慣で「ほぼ毎日」と回答した者はおらず，喫煙習慣でも「ほぼ毎日」と回答した者は5.9％にとどまっている。未成年者の飲酒や喫煙の習慣化は，大人の指導や監督の目が届いていない状況にあることを示しているとも考えられるため，処遇に当たっては，飲酒や喫煙状況を含めた生活習慣を把握し，小さな逸脱行為と見逃すことなく，やめるように根気強く指導することが重要と考えられる。

２　生活形態

生活形態について調査したところ，デシスタンス群，再入院群共に有職者が過半数を占め，その割合に顕著な差は認められなかったが，デシスタンス群は，再入院群に比して，就学中の者が多く，無職者が少なかったことから，就学中であることと立ち直りの関連性が示唆される。ただし，就学中の者のうち，学校に行くことを楽しいと感じている者の割合は，デシスタンス群では一般群よりも低いことから，学校生活を維持させるためにも，動機付けを高めさせる働き掛けや学習支援が重要と考えられる。

また，デシスタンス群，再入院群共に，一般群と比べて仕事又は学校を続けることに困難を

感じやすい。特に，再入院群は，６割以上が仕事又は学校を続けることに困難を感じており，デシスタンス群，再入院群共に，仕事を見つけることや進学よりも，就労を続けること，就学を続けることに困難を感じる者の方が多くなっていることから，処遇における，就学や就労を継続するための支援の必要性が指摘できる。今回の調査では，顕著な差を認めることができなかったものの，給与面の満足度など，生活形態に関する主観的な受け止めと立ち直りの関連については，今後，より詳細な分析及び検討が求められる。

３　対人関係

対人関係について調査したところ，家族関係では，デシスタンス群は，再入院群に比して，家族との夕食頻度が多く，家族に関する肯定的感情を有し，家族とうまく生活することに関する困難を感じておらず，家族からのサポートを感じる程度が高かった。家族関係の良好さを示すこれらの特徴は，一般群とも共通するものであった。

友人関係では，デシスタンス群は，再入院群と比べて，友人との会食や集まりの頻度が少なく，友人関係の健全性が高い一方で友人の非行性は低く，以前の不良仲間からの誘いに関する困難や非行や犯罪にかかわっていない友達を作ることに関する困難を感じていないことが示された。

以上の結果から，デシスタンス群の特徴として，家族に対する肯定的感情及び頻繁な接触機会という，いわば質・量共に良好な家族関係がうかがえるとともに，友人の健全性が高いが，友人との接触は極めて頻繁な状況ではないことがうかがえる。処遇に当たっては，家族関係を重視し，家族に対する肯定的な感情や家族との交流機会の向上を目指した家族関係の質・量の両面に対する働き掛けを行う一方で，友人関係については，不良交友を絶つことを主眼として，友人との交遊に過度に傾倒しない関係を築かせることが立ち直りを支える要因となることが示唆された。また，被害者への謝罪や被害弁償に関する困難は，デシスタンス群の方がより感じていることが示された。この点については，被害者への謝罪や被害弁償に関して真摯に考える姿勢が，困難の受け止めにつながっていることが推察され，少年院や保護観察における被害者の視点に立った指導や，自身の非行の重大性を認識させることの有効性が支持されたと考えられる。

４　心理的特徴

心理的特徴について調査したところ，デシスタンス群は，再入院群に比して，自己肯定感，

内的統制傾向，目標指向性，希望，自制力の程度が高いことが示された。すなわち，デシスタンス群は，再入院群と比べて，自己肯定感が強く，自己の行動によって物事の結果を変えることができると信じており，自分の行動を制御する力が高い。

これらの特徴は，一般群とも共通するものであった。デシスタンス群と再入院群の差については，少年院入院以前からの差異や資質面の違いを反映している可能性も否定できないが，少年院での自己肯定感を高め，自己統制力を身に付けさせるという処遇のねらいの正当性及び取組の有効性を支持する結果であると考えられる。一方，一般群と比べて，内的統制傾向の高さ，目標指向性の程度の高さ，過去受容の程度の低さが指摘でき，少年院出院後に再入院せずに生活できていることは，自身の行動によって物事の結果を統制できるという実感につながると考えられ，また，目標指向性の高さが立ち直りに向けた具体的指針として機能していることもうかがえる。ただし，以前に非行に及び少年院送致となった過去がある点で一般群よりも過去受容に困難があることも推察され，処遇に当たっては，過去を立ち直りに向けた資源として受容するための支援が望ましい。

5　一般青少年との比較

就学・就労状況について，一般群と比べてデシスタンス群は，有職者の割合が高いものの仕事又は学校を続けることについて問題や困ったことがあった者の割合も高かった。就職や進学・復学に向けた働き掛けに加えて，就労や就学の継続のための支援が必要と考えられる。

家族関係について，デシスタンス群は，家族に対する肯定的感情を有し，家族とうまく生活することに関する困難を感じておらず，家族からのサポートを感じる程度が高い点において，一般群と同様に家族関係が良好であることが指摘できる。家族関係の改善に向けた働き掛けは，一般青少年における家族関係を目標として行うことが望まれる。

友人関係について，デシスタンス群は，一般群と同様に友人関係の健全性の高さが指摘できる。しかし，デシスタンス群は，立ち直りの過程において，それまでの不良交友を絶つことが求められ，新たに適切な交友関係を築くという課題を有していることが推察され，そのための支援の必要性が示唆される。

参考文献

安達智子（1998）．セールス職者の職務満足感―共分散構造分析を用いた因果モデルの検討―心理学研究，*69*(3)，223-228.

Bottoms, A.,& Shapland, J. (2011). Steps towards desistance among male young adult recidivists. *Escape routes: Contemporary perspectives on life after punishment*.Routledge, 43-77.

Grasmick, H, G., Tittle, C, R., Bursik, R, J., & Arneklev, B, J. (1993) Testing the core empirical implications of gottfredson and Hirschi's general theory of crime. *Journal of research in crime and delinquency, 30*(5), 5-29.

法務省法務総合研究所編（2014）．研究部報告54　非行少年と保護者に関する研究―少年と保護者への継続的支援に関する調査結果―　株式会社キタジマ.

鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治（1982）．Locus of Control 尺度の作成と，信頼性，妥当性の検討　教育心理学研究，*30*(4)，38-43.

白井利明（1994）．時間的展望体験尺度の作成に関する研究　心理学研究，*65*(1)，54-60.

Thornberry, T, P., Lizotte, A, J., Krohn, M, D., Farnworth, M., & Jang, S, J. （1994）. Delinquent peers, beliefs, and delinquent behavior: A longitudinal test of interactional theory. *Criminology, 32*(1), 47-83.

堤明純・萱場一則・石川鎮清・苅尾七臣・松尾仁司・詫摩衆三（2000），Jichi Medical School ソーシャルサポートスケール（JMS-SSS）改訂と妥当性・信頼性の検討　公衆衛生学雑誌，*47*(10)，866-878.

van der Geest, V., Blokland, A., & Bijleveld, C. (2009). Delinquent development in a sample of high-risk youth: Shape, content, and predictors of delinquent trajectories from age 12 to 32. *Journal of research in crime and delinquency, 46*(2), 111-143.